

祢布ヶ森遺跡位置図



▲木簡の発掘調査風景

■木簡に書かれた文字

見つかった木簡は、奈良大学教授の寺崎保広さんの協力を得ながら、奈良文化財研究所の史料研究室と共同で解読を進めました。

その結果、203点の木簡から、320の文字を解読することができました。木簡に書かれた文字は、『詩経』の一部を書いたもののほか、人名や地名、年号、九九の練習、同じ文字を繰り返し練習したものなど、さまざまな内容のものがありました。

■県内最多の木簡

祢布ヶ森遺跡では、これまでに16点の木簡が出土しているのですが、今回のもつと合わせて219点の木簡が出土したことになります。

県内で見つかっている木簡は約870点ありますが、そのうち、市内で見つかった木簡は、袴狭遺跡(出石)の76点、但馬国分寺跡(日高)の42点など、約440点。県内の木簡の約半数が、豊岡で出土していることとなります。

なぜ、こんなに多くの木簡が市内から見つかるのでしょうか。

一般に、木製品は乾燥した所でよく残ると思われがちです。しかし、湿度の高い日本では、空気や光から遮断され、木を腐らせる菌の活動ができません。地下水をたくさん含んだ土の中の方が残りやすいのです。夏場でも、長靴がないと発掘調査ができません。そのような環境が、木簡を大切に保存してくれたのです。

さて、全国60カ所余りに置かれた各地の国府跡でも木簡が出土していますが、点数では、栃木県の下野国府に続いて全国で2番目に多い出土となります。

■木簡が出土した場所

今回の木簡は、絶えず水が流れる川や溝ではなく、流れのない濠から出土しました。離れた場所から流されてきたものではなく、濠のすぐそばで捨てられたものが、沈んでたまったものであることが分かりました。

これは、濠のそばに木簡を書いたり、削ったりする施設があったことを示しています。国府内の施設で仕事や生活を送っていた、但馬国府の役人の姿が生きたとよみがえってくるようです。

■『詩経』の一部が書かれた木簡

折敷という膳の裏に、「凄寒風也」「東風曰谷風」「匏苞」という文字が書かれていました。これは、中国最

古の詩集『詩経』の注釈書に見える文字であることが分かりました。

当時の都には、「大学」という中央官僚の育成を目的にした施設がありました。そこでの選択科目の一つに挙げられていたのが、『詩経』です。一方、「大学」で必修科目となっていた『論語』の内容を書いた木簡は、平城京や袴狭遺跡を含め、各地で見つかっています。

しかし、都でも見つかっていない『詩経』の内容を書いた木簡が見つかったことは、あまり普及していなかった『詩経』の注釈書が但馬にあり、それを使って役人が漢詩の勉強をしていたことを物語っています。

木簡の書かれた西暦810年ごろは、国内で天皇の勅による漢詩集が編集されていたときで、地方における漢詩の普及を示す資料と言えます。ところで、当時の但馬国府に国司として赴任していたのは桓武天皇の皇子である良岑安世(785〜830年)という人物です。

彼は文武に秀で、淳和天皇の勅で作られた漢詩集『経国集』(827年)の編集を任せられ、当時の三大漢詩集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』に漢詩を残しています。

『詩経』木簡と、漢詩に造詣の深い良岑安世の存在。何かのつながりがあると思いませんか？